

地域の暮らしと深く関わる三陸の道づくり
～ 三陸の道づくり40年を振り返って ～

東北地方整備局 三陸国道事務所 調査課 まつむらひでお 松村秀男

1. 目 的

一般国道45号の通る三陸沿岸地方は、南部は複雑に入り組んだリアス式海岸、北部は隆起海岸で峻険な地形と山地に囲まれ、道路を整備するには極めて厳しい地形となっている。昭和47年に国道45号の一次改築が完了し、地域間の時間距離が大幅に短縮され、人や物などの交流に大きな役割を果たす道路となった。

本稿は、三陸の道づくり40年を振り返り、このような地形を克服して整備された国道45号が、地域に何をもたらし、人々の暮らしをどう変えたのか、道路整備が果たした多彩な役割とその効果について取りまとめ、一般の方々に情報発信するとともに、今後の道づくりへのさらなる関心の高揚を図ろうとするものである。

2. 国道45号の変遷

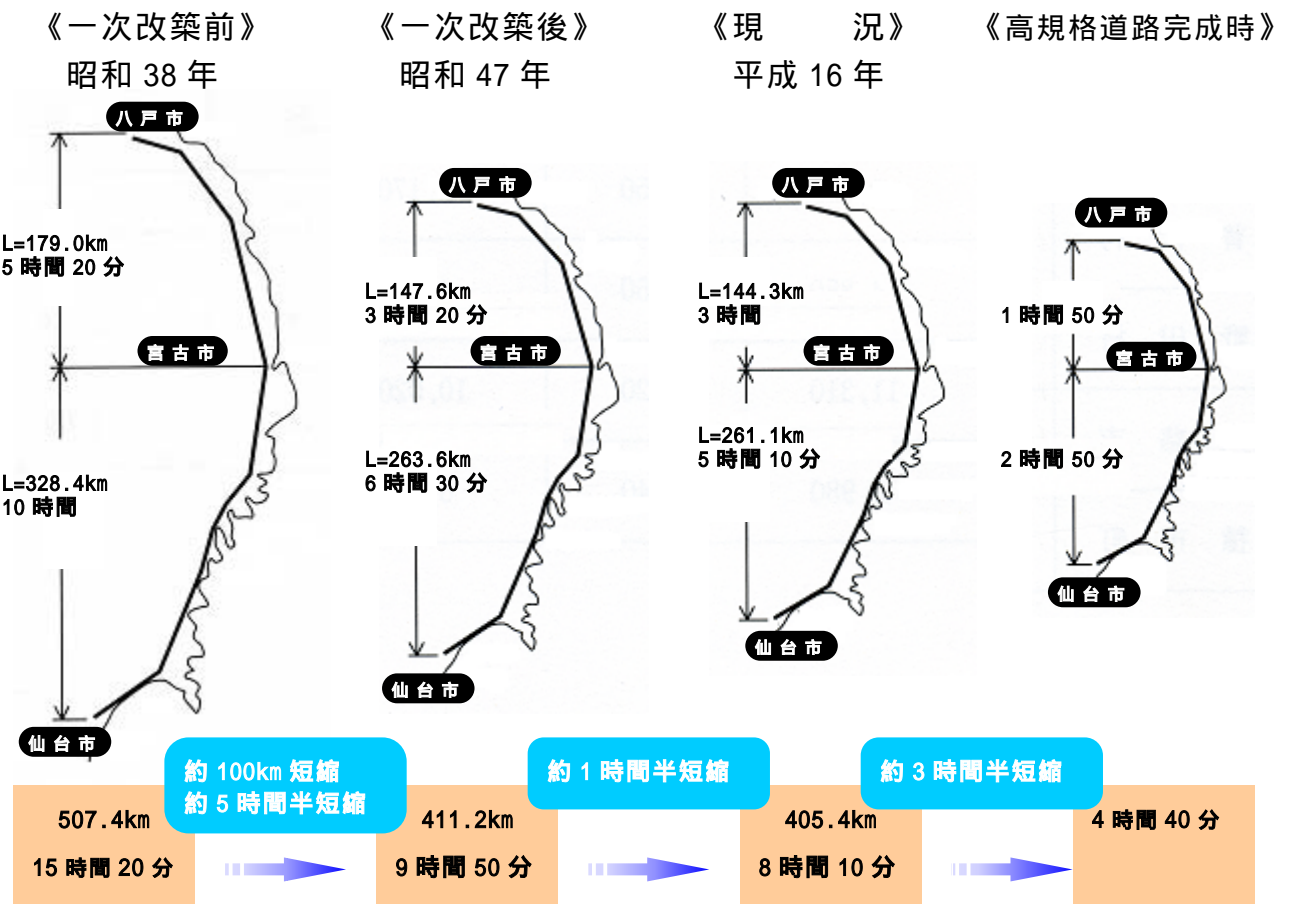
国道45を直轄改修事業として着手したのは昭和38年からであり、それ以前には岩手県により局部的な改良が行われていた。着工当時は国道とは名ばかりな急峻で狭隘な道路で、田野畑村槇木沢地区などでは車での通行ができない状態であった。

昭和47年の一次改築の完成により、県内の国道45号の延長は328.9kmが245.3kmと約80km短縮となった。

昭和62年6月30日には一般国道の自動車専用道路である高規格幹線道路として、三陸縦貫自動車道(仙台市～宮古市)、八戸久慈自動車道(久慈市～八戸市)、平成6年12月には地域高規格道路として三陸北縦貫道路(宮古市～久慈市)が指定され、三陸沿岸で待ち望まれていた高速道路等の整備が進められている。



3. 三陸沿岸部の道路整備による時間距離の変化



4. 整備事例に見る暮らしの変化

4.1 地域住民の安全を守る（大船渡市）

平成17年3月に開通した三陸縦貫自動車道大船渡三陸道路には、県立大船渡病院と直結する、直轄としては全国初の「救急車退出路」が設置された。自動車専用道路と病院を直結したことにより、開通からの1ヶ月間で70回（2～3回/日）の利用があり、緊急退出路は1分1秒を争う救急医療活動に大きく貢献している。



救急車退出路と県立大船渡病院

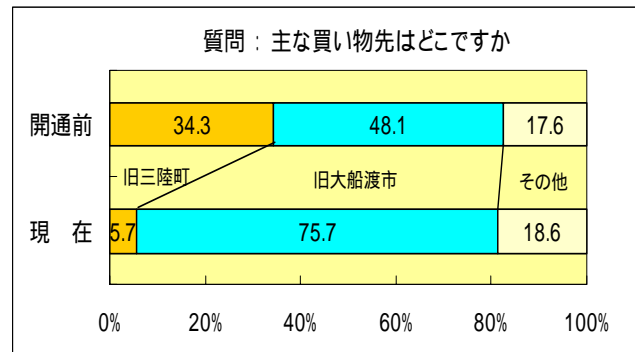
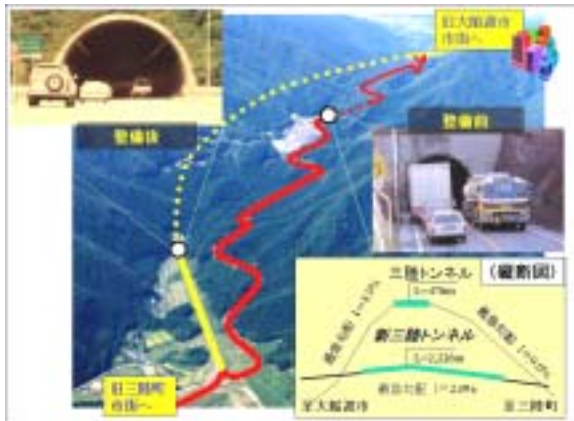
車内での救急処置が効率よく行えるようになった。走行中の患者への負担も軽減されている。

現道のように人や車の出入りが無いので、安心して搬送できるようになった。

大型車が三陸縦貫自動車道に転換したことにより、現道の混雑が解消され、市内の救急搬送がスムーズになった。

4.2 難所を克服し人・物の交流を促進（大船渡市）

旧三陸町と旧大船渡市の間にある三陸峠は標高333mの位置にあり、急勾配・急カーブが連続し、特に冬期間は交通の隘路となり地域間交流の妨げとなっていた。この三陸峠の克服を目的に、三陸縦貫自動車道 大船渡三陸道路の一部である新三陸トンネル区間が平成5年に開通した。この「1本のトンネル整備」により地域間の交流が活発となり、平成13年11月15日に旧三陸町と旧大船渡市が合併し、新・大船渡市が誕生した。



開通後の旧三陸町住民アンケート調査より

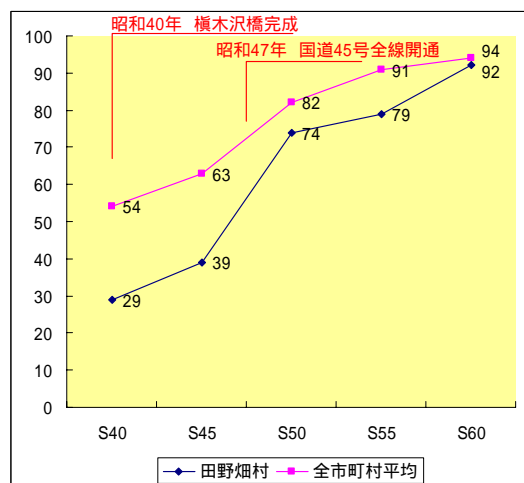
4.3 暮らしが便利になった（田野畑村）

田野畑村は深さ100mものV字谷がいくつも刻まれ、集落を「陸の孤島」に分断し、昭和30年代まではひとつ隣の町に行くにも山道を避け、舟をこいで行っていた。かつて郡役所の役人が自分の進退を思案し、辞職までも考えたというこの様なV字谷を、槇木沢地区の生徒達は谷をはさんだ向こう側の学校まで片道1時間かけて通学していた。

昭和40年の槇木沢橋の完成により、今までの通学時間が片道1時間から15分に短縮された他、村民待望の宮古市～久慈市間のバス運行も開始され、宮古市や久慈市へは日帰りで行けるようになった。



昭和40年に完成した槇木沢橋



高校進学率の推移

5 . 広報活動

国道45号が果たした役割とその効果について取りまとめたパンフレット等を作成し、当事務所における日常的な活動の中で情報提供を行った。

女性との意見交換会

大船渡、釜石、宮古、久慈の沿岸4地区で開催された、女性との意見交換会においてパンフレットを使って紹介。



女性との意見交換会

出前講座

久慈工業高校における出前講座の中において、ビデオを使って紹介。



久慈工業高校における出前講座

事務所イベント等

大船渡三陸道路開通式及びイベントなどの、一般の方が多数参加されるイベントにおいて紹介。

6 . 結 論

国道45号は、沿岸市町村間の移動時間距離をただ短縮させただけでなく、暮らしを便利にし、人や物の交流、地域の文化を活性化させ、人々の暮らしに無くてはならない道路となった。これからの道づくりにおいては、地域の声がますます必要となっている中、宮古地区では道づくりに対する意識が高まり、暮らしに密着している女性ならではの視点から道路整備に必要な活動を行う「明日を拓く宮古のみち女性の会（会員700名）」が平成16年11月に設立され、地方の声を中央へ発信している。



明日を拓く宮古のみち女性の会
設立総会

7 . 今後の課題

昨今、公共事業を取りまく環境は厳しさを増しており、一段と事業の効率性・有効性を示す事が求められている。このような状況下の中で、三陸管内のような人口が少なく、圏域が広大で、地域間には険峻な峠などが聳えている地域において、都市部と全く同じ物差しで事業の意義を示す事は、非常に困難な課題である。

しかし、三陸地域には交通隘路区間の解消や、地震津波等に対する防災対策、地域医療の支援といった地域の暮らしに直接係わる問題がまだまだ残っており、適切な対応を図っていく時期に来ている。今後も一般の方々に対し十分な情報提供を行うとともに、道の果たす役割を良く理解され、道が良くなること熱望している三陸沿岸地域の方々といっしょに、「地域とともに」地域を活かすみちづくりを進めて参りたい。